全国高校バスケット選抜優勝大会・県予選決勝

▶9月21日・兵庫県立文化体育館　報徳75―73村野工

# 死角の連続3点シュート

両チームがほぼ交互に攻撃を繰り返し、得点を重ねていくバスケットボール。通常2点のシュートに比べ、3点シュートは大きな武器となる。ただ、点差を詰め、広げられる一方で、外すリスクも高い。全国高校選抜優勝大会兵庫県予選の男子決勝。ともに初優勝を狙う報徳と村野工は終盤まで競り合っていた。試合を決定づけたのは、残り2分から報徳・岸功一主将が立て続けに決めた3点シュート。成功の背景には、リスクを極力排除した冷静な判断があった。（井川朋宏）

初優勝を懸けた新鋭同士の直接対決は、今季ここまで1勝1敗。選抜大会の出場1枠をめぐり、今予選も決勝で激突した。

村野工は速いテンポの攻撃が強み。対する報徳は3点シュートが得意なエース中野が大黒柱だ。村野工は当然ながら、中野に徹底マークをつけてきた。試合の序盤、硬さも目立つ報徳はマンツーマン守備が速い攻撃に振り回され、第1クオーター（Q）途中で0―18となった。

報徳も、すぐに対応する。第1Q途中からゾーン守備に切り替えたほか、攻撃は外角の中野らに相手守備が寄った隙を突き、チーム最長身の金剛鉉を軸に、スペースのできやすいゴール近くを重点的に攻め始めた。

作戦は奏功。追い上げるにつれ、岸は「内角も相手は気にし始めている」と気付いた。外角では中野への警戒が変わらず厳しかったが、そこ以外にはスペースができやすくなっていた。3点シュートの好機だった。

## 防御かわし打てる状況へ

3点シュートは決まれば相手に与えるダメージが大きいが、距離がある分、成功率は通常のシュートに比べて当然低い。外せばせっかくの攻撃権を手放しかねず、終盤の接戦での使用は、もろ刃の剣ともいえる。成功率を上げる鍵は、いかにフリーで打てる状況をつくれるか。そこに工夫が必要になる。

岸は中野に次ぐ得点源で、内外角ともに攻撃できるオールラウンダー。外角の中野へのマークもあり、第3Qまでは主に内角への攻撃の組み立てがメーンだった。得意の3点シュートは、ここまでわずか1本だった。

しかし第4Qからはプレースタイルを切り替えた。51―59と小さくない点差を追わなければならず「気持ちを入れた」。内角も攻めながら、外角から3点シュートを増やす。序盤にこの日2本目の3点シュートを決めるとリズムに乗り始め、残り2分を切ってさらに3点シュートに成功し、72―71と逆転した。

続く相手の攻撃は失敗。報徳は突き放すチャンス。岸は冷静だった。さらに連続で3点シュートを決めれば、リードは4点差となり、相手が追いつくには最低2本のシュートが必要となる。「相手は苦しいはず」

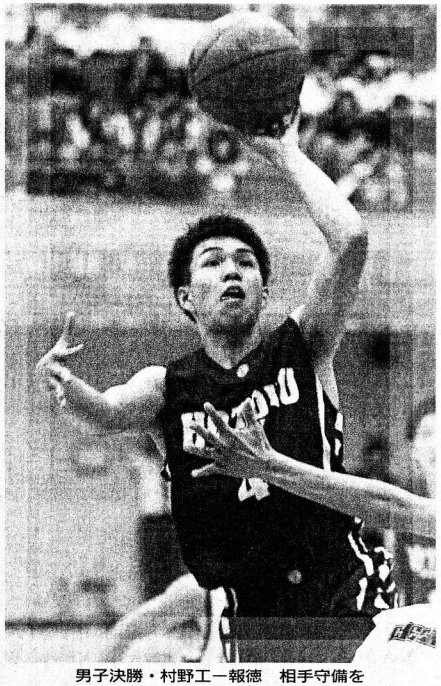
もしシュートを外し、ボールを奪われると再逆転の好機を与えてしまうが、岸は周到だった。相手ゴールに向かいながら左奥へ移動。コートの角で、ゴールへの角度がない場所だった。シュートをバックボードに当てられないので難易度が高いものの、広い範囲をカバーする相手守備にとっては死角になりやすい。岸は手首を柔らかく使うシュートを磨いてきて、フリーなら正確に打てる自信があった。

残り43秒。ゴール下から岸にボールが渡ったとき、相手守備は全体的に右側に寄っていて、岸の周囲にはこの試合で最も大きなスペースが生まれていた。「相手は見えず、入る気しかしなかった」。相手守備は遅れ、シュートは理想の放物線を描いてリングを通過する。この追加点が功を奏し、試合は最終的に2点差で制した。岸は第4Qだけで16得点の活躍だった。

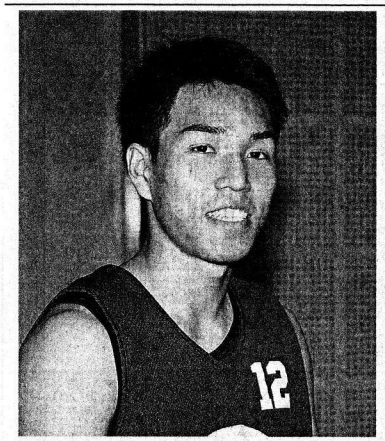
## 信頼が生んだ最後のパス

今年は旧チームからの主力がほぼ全員残って連係が向上。今夏以後は、チームで内外角どちらでも得点できるよう攻撃の幅を広げる努力を重ねてきた。さらに、部員の推薦で旧チームから主将に指名された岸は人望が厚く、「あの場面で外しても誰も文句は言わない」と田中コーチ。日常から培った信頼感が岸への最後のパスにつながった。

初の全国舞台だった今夏の全国総体は2回戦負け。岸は「外角シュートの確率を上げ、全国の（身長の）高さに対応したい。8強を狙う」と躍進を誓う。



男子決勝・村野工―報徳　相手守備をかいくぐる報徳の岸＝9月21日、神戸市長田区の兵庫県立文化体育館



**報徳高・主将　岸功一（18）**

**きし・こういち**　1996年生まれ。西宮市立高須南小（現高須小）5年でバスケットボールを始めた。同市立鳴尾南中出。ポジションは主にフォワード。内角へ切れ込むプレーや3点シュートなどオールラウンドなプレーを得意とする。報徳高では旧チームから主将を務める。180㌢、77㌔。

スローモーション　その一瞬　㊴

兵庫アスリートの深層

◆次回は10月に掲載します。